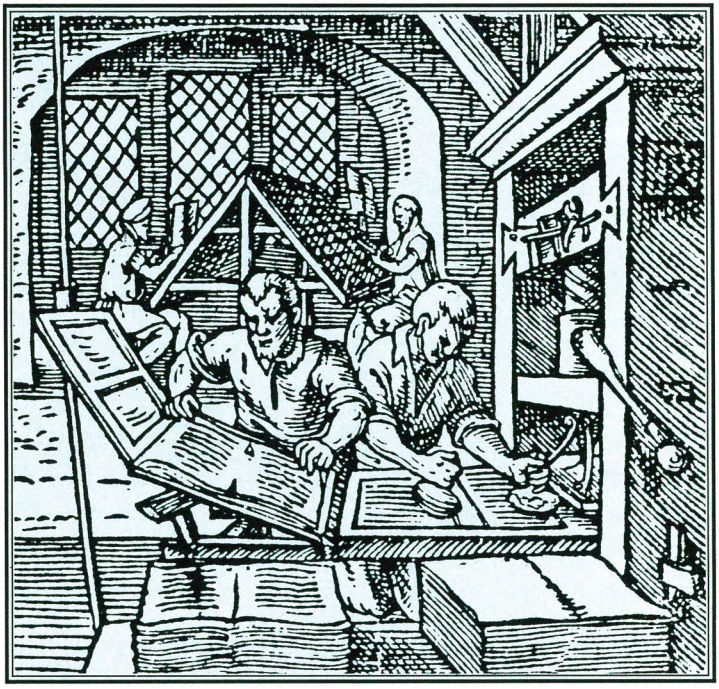
大学出版

'96 冬

No. 28



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会

大学出版
28号

Winter・1996

読書の周辺　十九世紀末の物理学教科書と実験器械　――永平　幸雄　1
読書の周辺　電車の中の風景　――現代読書空間考　――岩見　和彦　6
第14回韓日大学出版セミナー参加紀行　――朱　弘均　11
大学図書館と阪神・淡路大震災　――熊谷　俊夫　16
大学出版部ニュース　――　20
新刊案内'95・10～'95・12　――　28
製作の現場から　13　――　表3

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

■読書の周辺

十九世紀末の物理学教科書と実験器械

永平　幸雄

十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて人気のあった物理学教科書にガノーの物理書がある。著者のアドルフ・ガノーはフランス人で、もともとはフランスで出版された物理書であるが、人気があったため、各国語に翻訳されて世界中で使用された有名な本である。オランダ語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、もちろん英語にも訳されて出版された。英語版の初版は一八六三年で、日本では、明治初期に東京大学理学部や札幌農学校で物理学教科書として使用されている。フランス語の初版は一八五一年で、本文六六〇ページと大部な本であるが、売れ行きがよくて版を重ね、次第にページ数が増え、一八八七年の二十版ではページ数は一四四七ページという超大部な物理書になった。

ガノーの物理書が人気のあった原因の一つに、当時の実験重視、実用主義の時代風潮に合致していたことが挙げられる。そのことを反映して、確かにガノーの物理書には精細できれいな実験器械の図版が数多く掲載されている。例えば英語版十四版（一八九五年）では、一〇二八枚の木版画と九枚のカラー図版が付いていることが本の見開きページにわざわざ述べられている。図版の多さをセールスポイントとしていたことがわかる。本分のページ数は一〇九二ページであるから、ほぼ一ページに一枚の図版が掲載されていることになる。現在の物理学の教科書からすれば考えられないほどの図版の数である。しかも器械の働く原理を示すための簡単な説明図ではなく、器械を写真で写したかのように精細に描かれた外観図が多い。

ガノーの物理書には実験重視を述べたただし書きはないが、ガノー書と同じく当時人気のあったカッケンボスの物理書は、はっきりと実用的で、実験重視の物理書であることをうたっている。その裏表紙の説明で、その書の目的は「科学的な諸原理の日常生活への応用」を示すことであり、教科書の特徴として「実験器械によらずに使用可能で、実験について完全な説明を行い、実際的な練習問題と沢山の挿図を収録している」ことをあげている。

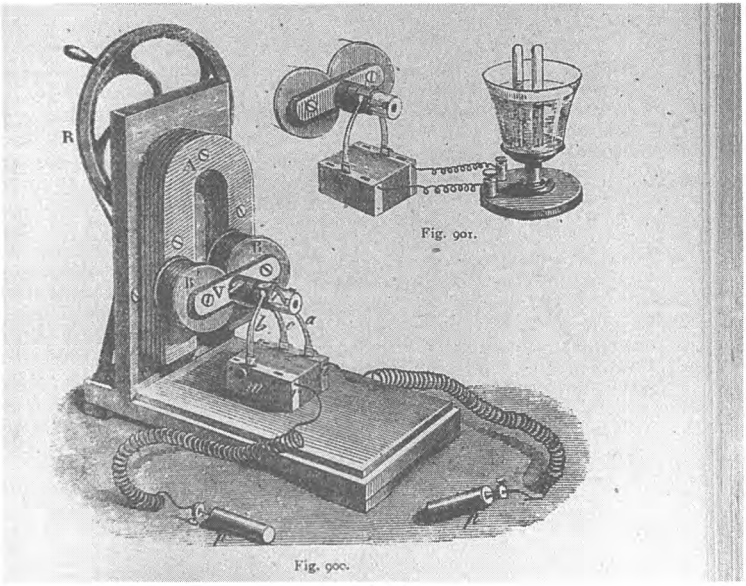


図1　磁石発電機

ガノーの物理書から実験器械の一例をあげて十九世紀後半の物理書の実用主義的記述を見てみよう。図1はガノーの物理書に掲載されている磁石発電機の図である。非常に精細に描かれており、我々、科学史や技術史を研究するものにとって、当時の発電機の様子を生々しく想像することができ、とてもありがたい図版である。一八三一年、有名なイギリスの物理学者ファラデーが電磁誘導を発見し、その四年後に、この図の発電機が、ロンドンの科学器械製造業者クラークによって発明された。始めて本格的に実用化された発電機で、クラークの磁石発電機と呼ばれ、特に医療用として神経性の病気への治療などに用いられたりした。クラークの電気治療器は、日本には少なくとも二台は保存されており、順天堂大学医学部医史学研究室と京都大学総合人間学部にそれぞれ一台ずつ現存している。

この発電機の構造を述べよう。大きな馬蹄形の永久磁石が鉛直方向に向けて固定されている。そのそばに二つのコイルが一つの中心軸の周りを回転するようにつなぎ止められている。図の左の車輪を取っ手で回すと、二つのコイルが馬蹄形磁石のそばで回転し、発電される。その電流を回転軸に付けられた整流子から取り出し、電線を通して二つの端子に導く。その端子を体の一部に当てて治療する。写真右上の図は、治療用ではなく、発電した電気で水の電気分解を行うことを示す図である。

ガノー物理書ではこの器械の説明が非常に微細にわたり

詳しく述べられており、説明は実に五ページにわたっている。その一部を例にあげると、「それぞれのコイルは、非常に細い絹被覆の銅線を約一五〇〇回巻いた巻き線から作られている。コイルBの銅線の一端はコイルBの銅線の一端と回転軸のところで結び付けられ、それぞれの他端は、……と言った具合である。器械の構造、作動原理、応用の仕方等詳細に述べられていて、これだけ微細にわたった記述ならば、器械の製造も曲がりなりにもできそうである。確かに、カッケンボスの物理書に述べられているように、実験器械がなくても器械の構造が理解でき、実験の完全な理解ができるように極めて詳細に記述されている。

このように実験器械の挿し絵の多い十九世紀後半の物理書を見ていると、実際の実験器械そのものを調べてみたい欲求にかられる。しかし実験器械は、図書とは異なり、保存されることが少ない。図書の場合、古くなってもその価値を認められており、図書館は大事にそれらを保存していく。たとえ処分されることがあっても、それらの古書は古書店ルートを通じて研究者やマニアの手にわたって再利用されていくことが多い。実験器械の場合、古くなって使用できなくなれば、直ちに処分されるのが普通である。新しい実験器械を手に入れると、スペースの点でも古い器械を置いておけなくなる。

ところが、極めて稀なことに、明治初年からの古い物理実験器械が京都大学総合人間学部（旧教養部）に残っていた。私は、元総合

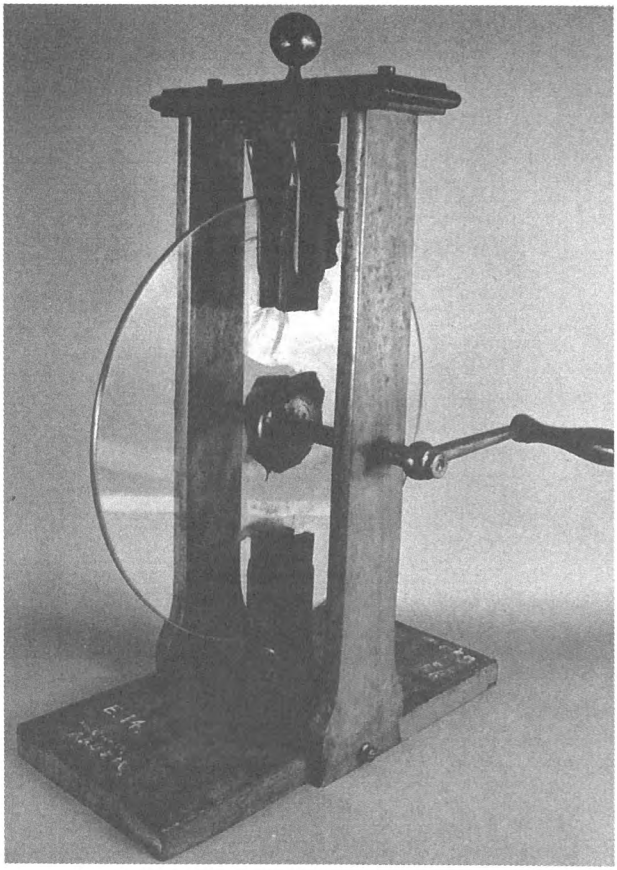


写真　摩擦起電機（京都大学所蔵）

人間学部の川合葉子氏、現在総合人間学部に所属している鉄尾実与資氏とともに、この数年それらの実験器械の調査に当たっているのだが、いままでの調査では、明治期の分で三五〇点、昭和二十年までの分で五五四点という多数の実験器械が残されていることがわかった。しかも明治十四年以前、おそらくは明治十一～十二年頃に購入したと思われる古い実験器械も多数保存されていた。明治という時代は、西欧の近代科学、近代技術が日本に大挙流入してきた時代であり、日本の科学技術の歴史において極めて重要な意味を持つ時代である。その時代の物理実験器械は、また極めて貴重な歴史資料となる。

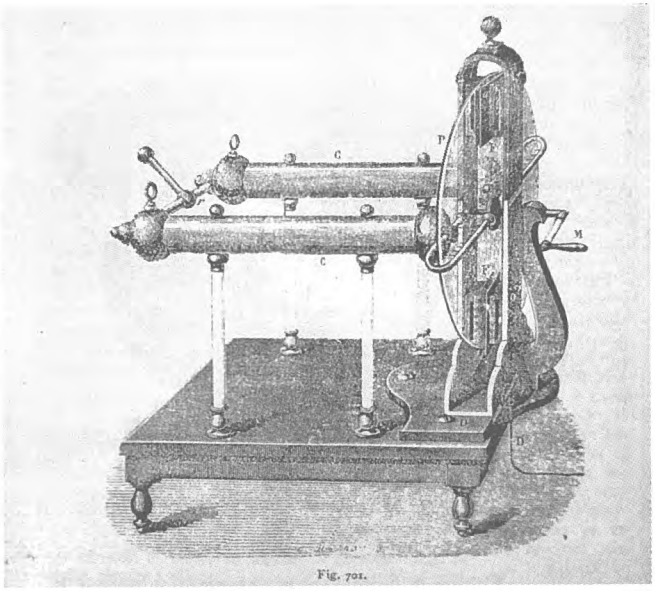


図2　ガノー物理書の摩擦起電機の図

この京都大学の物理実験器械の使用方法や使用目的を調べるために、ガノー物理書のような十九世紀末の物理書を調べていくと、それら物理書の挿し絵図に全く同一の器械図があることがわかった。その一例を挙げてみよう。前ページの写真は、京都大学の摩擦起電機である。

総合人間学部所蔵の実験器械台帳には「ラムスデン氏電気器」と書かれており、購入は明治十四年以前であることがわかった。この起電気はロンドンのメーカーの製品で、購入金額は十八円である。同じ摩擦起電機の図が十四版（一八九五年）のガノー物理書に載せられている。（図2）

摩擦式の起電機は、もともとはマグデブルグ市の市長であったゲーリケが一六七二年に発明したもので、当初は硫黄球を回転させて摩擦させていた。その後、改良がなされ、一七六八年、イギリスの光学器械・科学器械業者のジェス・ラムスデンはガラス円盤を始めて使い、それを回転させて皮革と摩擦させ、静電気を発生させた。この器械に彼の名前が付けられているのはそのためである。当時は静電気の時代であり、この起電機は電気研究には欠かせない最も重要な器械の一つであった。ガノー物理書に描かれ

ている電気を伝える金属導体部分は、総合人間学部の摩擦起電機には失われている。

物理書で説明されている物理実験が実験器械の存在でより明瞭になるのと同じく、実験器械の使用法や構造は物理書の説明によってより明確になる。例えば、ガノー物理書の摩擦起電機の図で、右端の台に鎖が垂れ下がっているが、それは摩擦で皮革に発生した負電荷を回転ガラスを支えている支柱を通し、台から地面に逃がすためのものである。導体の金属円柱を支えているのはガラス柱で、台と絶縁するために付けてある。また発電量は大気の湿度に大きく影響される。このようなことがガノー物理書に書かれている。こうして器械の構造や使用法が物理書によってはっきりとわかるようになる。もともと物理実験器械と物理学教科書の両方を使って教育にあたってきたのであるから、両方があって始めて当時の物理教育の状況にせまることが出来るのは当然のことである。

したがって、物理教育史をたどろうとすると、物理書と物理実験器械の両方がそろっていることが望ましいのだが、実際には、日本では実験器械がほとんど保存されていない。しかし、近代科学の発生の地であり、長い歴史研究の伝統を持つ西欧諸国では、多数の実験器械が博物館や大学に保存、展示されている。また古書と同様に、古実験機器の販売ルートや収集家も存在する。日本でも古書と同様に古実験器械の保存に努め、書物と器械の両方が歴史的史料として重要であることを認識していくことが必要である。

（大阪経済法科大学教養部教授）

■読書の周辺

電車の中の風景

――現代読書空間考

岩見 和彦

□読書空間としての車内

電車通勤（通学）をしている者にとっては、車内はちょっとした読書室となる。見知らぬ人と話をする必要もない以上、人さまに迷惑がかからない読書にはうってつけの場と時間を提供してくれるからである。音読はもちろん許されない。黙読が前提である。

一人で電車に乗っている時は、普通、人は黙っている。もちろん他者には「聞こえない声」を自ら発している場合もあるし、本や雑誌が発している、やはり他の人には「聞こえない声」を聞いている場合もある。後者が、いわゆる黙読である。この黙読が印刷術の発明と大量の本の普及を介して、近代的個人の自己認識を確固たるものにしたというのは、メディア史研究が教えてくれるところである。声の文化から文字の文化への移行は、読み手に他者の排除と沈黙を要求し、自己中心主義的な精神性を際立たせることになった。その結果、学問も「本の学問」へと変貌したと解釈されている。

私の車内読書の体験を振り返ってみても、読書能力が高く、いつも読まなければならない本を積み上げてそれらを精力的に読み上げることにとり憑かれていた若き時代には、一週間で何冊読んだということが、自分の自尊心を満足させる尺度でもあった。活字媒体を黙読するというアカデミズムの一つのスタイルを、車内の身体にもしみつかせようと必死だったに違いない。そして以前には、確かにそういう黙読を可能にする車内の雰囲気が、つまり公共空間においては他人のことには関心を払っていないような素振り（儀礼的無関心）をすることが、乗客文化として共有されていたような気がする。だから、例えば遠足シーズンなどに出会うあの喧騒は、貴重な読書環境の妨害以外の何物でもなく、しかめ面をするしかなかったわけである。

そのような事情は、基本的には今も変わっていないのかもしれない。現に、私たちが体験している今どきの車内生活も、だいたい同じようなものだからである。けれども、以前の車内の様子がまったく変わっていないかというと、

そうともいえない点もあるようだ。単に私の読書能力、身体能力が衰えた分、自分の車内生活がかつてのような読書一辺倒ではなくなっただけで、それに応じて周りのノイズが気になりだしたという事情があるかもしれないにしても、である。

□電車の中の風景を読む

私は週五日ほど電車を利用するが、勤務や所用の都合で時間帯は一定していない。したがって朝夕のラッシュアワー、遅出のパートの人たちや都心への買物客の多い時間、乗客の少ない昼間、一杯機嫌の人を満載した最終電車など、いろいろな車内体験をしていることになる。だからかもしれないが、最近、電車の中での人びとの振る舞いがずいぶん多様になったように思う。いろんな人が乗り合わせているわけだから、その行動が様々なのは当然だろう。

性や世代、職業、階層、趣味やライフスタイルといった一般的要因のいろいろな組合せが、車内での振る舞いのパターンを決めている可能性は大きい。ただし、同じ人であっても、混み具合い、座っているか立っているか、乗車時間の長短など、同じ電車の中といってもその都度状況が違うので、それほどはっきりしたスタイルはとれないという事情もある。もちろん、その時の気分や健康状態、前後のスケジュール次第で過ごし方も違ってこよう。だからこそ、いろいろな姿が見られるわけだ。

私の場合、とりたてて決まったパターンがあるわけではない。最近は決して熱心な読書家とはいえそうもない。概してずいぶんと気ままに過ごしている。忙しい時には寸暇を惜しんで眠る時間にあてている。その時々の必要と気分に応じて小説、週刊誌、スポーツ紙や夕刊紙を手にすることもある。それでも職業柄、専門書、論文の抜き刷りや学生のレポートなどに目を向ける時がある。その時には「私は教師です」と名乗っているようなものである。そうした自己晒しが周りの人の強い関心を集めてしまう場合はまずいなぁと思いつつも、それでもけっこうマイペースで車内のひとときを過ごしている。

そんな私らしい過ごし方の一つに車内観察がある。広告やポスターの類へのチェックはもちろん、聞こえてくる会話に耳をそばだて、どういう人がどんな話題に熱心になっているか、また人がどんなファッションをし、どんな座り方をし、どんなマナーを身につけているかといった、乗客の言動や一挙手一投足に目と耳を向けるのである。誰もが自然にしている観察なのだが、私の場合かなり意識的にしかも入念に情報収集をしている。いささかタチの悪い観察者ではあるが、日常生活を社会学するうえで、私にとって車内は恰好のフィールドなのである。マン・ウォッチング、考現学の実践の場である。そして、その車内の風景がこのところ変わりつつあるのだ。

□車内風景の変容

いうまでもなく、まず目につくのは携帯ラジオ、ヘッドフォンステレオ、ポータブルCD・MD、そして携帯電話、ノート型パソコンの類など各種情報機器のすさまじい普及とその車内使用だろう。匿名の群衆が乗り合わせている高密度な空間にあっても、人は個人的にメディア＝情報とつながりプライベートな世界を確保する。また、ジュース・コーヒーなどの缶入り飲料水とスナック菓子の持込み飲食も、とくに若い世代では日常的な光景となりつつある。自分都合の飲食行動がかつてのTPOのオキテを破り、公共空間を浸食し出したのである。さらに、よく話題になる若いカップルの身体接触型コミュニケーションも、確かにこのところ増えている。かつて支配的だった車内という状況の公共的定義から抜け出て、他者の好奇で容赦ないまなざしをものともせず、「したいことをしているだけ」という若者の身体コミュニケーションが、ここでも急成長しだしている。

こうした変化に加えて、人と本や雑誌をめぐる風景もいささか変容しているようである。朝の満員の通勤電車では男性サラリーマンのN紙優位は揺るがないのだが、文庫本やハードカバーの小説を腕を縮めるようにして読む姿が目につくようになった。帰宅時の電車では新聞の方は夕刊紙などに変わるものの、本を読む人の数が増え、しかも公共図書館の判が押されたり蔵書シールのついたものが想像以上に多い。周りを見渡して判読するかぎり、書名は歴史ものが圧倒的である。車内読書調査のデータがあるかどうかはわからないが、少なくともそういう印象が強い。同じく、かなり年長の男性諸氏が少年まんが誌を読んでいるとか、若い男性（大学生も含む）の競馬新聞が増えたとか、パソコン関係・グッズ関係・趣味関係のおびただしい種類の雑誌を手にしているとかいった傾向も、この数年いっそう顕著になってきた。しかし、これらはおそらく多くの人が気づいている、いわずもがなのことかもしれない。

ところが、女性の行動となるとどうも様子が違ってくる。例えば、中年女性が少女まんが誌を夢中になって読んでいたり、スポーツ紙を広げていたり、またクロスワード誌に鉛筆を走らせていたりする。文庫本の少女コミック、少年まんが誌、大衆歴史小説の熱心な読者と見受けられる若い女性がいるかと思えば、資格取得の参考書や英語のペーパーバックを開いている人もいる。俳句や和歌、謡や踊りの教本に目を凝らす老婦人にもよく出会う。この二、三年、こうした光景をよく見かけるようになった。

男性のどちらかといえばワンパターン化した読書傾向に比して、女性のそれからは従来の枠組みを軽やかに抜け出した自由さ、既成のジェンダー文化を越境する勢いといったものがうかがえる。プライベートな世界を表に分泌させ実にのびのびと車内生活を送っているのである。

ただし、こうした光景を目新しく感じることじたいが、

わが社会に、そして私自身の中に巣くっている両ジェンダー文化間の落差に由来しているのは明らかである。なるほど、この落差は大きく、新しい景色が全景をおおいつくしているとは、まだいえない。依然として過半の女性は女性向けのメディアと記事に多くは水路づけられているからである。しかしこのことを踏まえるにしても、いや踏まえるからこそ、先の新しい傾向が興味深いのである。

□読むべきは「読書の周辺」？

車内読書の多様化は、現代人のメディア＝コミュニケーション体験の多様化の反映の一面でしかない。その意味で、車内に持ち込めるかぎりの各種各様のメディアのうち、本人が取り出したものとのやりとりが、束の間の時間、人びとのメディア体験として立ち現れているのを、私は観察したつもりになっているに過ぎない。

この現れは現代人の日常生活のある種の豊かさに裏づけられた私生活化、ミーイズムの進行を反映しているに相違ない。そして女性たちがそれを強く表出しているということなのであろう。自分の世界を生きていることを車内という公共空間においても表出すること。他者のまなざしによって管理され抑圧されていたプライベートな自分の世界を開放し、自分の個性を積極的に編み上げようとする生活態度。これらが車内空間の変容を促しているもっとも根本的な要因なのである。

これには、私たちを確実に巻き込んでいるメディア革命が大きく与かっている。ウォークマンの例が典型的だろう。それは群衆の中にありながらプライベートな世界を自立させ、車内という場所性、場所へのとらわれを無化してしまう装置でもある。読むことによってだけではなく、聴くことによっても、人は車内から離脱できるようになったのである。

それにとどまらず、今日のメディア革命は車内空間をもっと複雑な多次元の世界に仕立て上げようとしている。携帯電話の使用は、おそらく車内読書を図書館的なものからいわば公衆電話館での読書に変えてしまうのではないか、と思わせる事件である。乗客同士の会話は、場の共有という点では話の全体を掌握できる自分が属する場の次元でのことであるが、携帯電話の「聞こえない声」は、ここにはいないのに車内という共有する場に侵入した「無言」の他者でしかない。聞こえるのは会話の半分でしかない。

このようにみてくると、電車の中の社会は、孤独な群衆が期せずして持ち込んだ多様なメディア文化の展示場だといえそうである。グループの乗客の間では「口承」コミュニケーションが活発に行われているし、一生懸命メモをとっている人は「筆記」の文化を体現しているわけだし、本や雑誌などの印刷物に目をこらすのは「活字」媒体の文化そのものだし、ヘッドフォンステレオや携帯電話、パソコンなどの「電子」メディアの体験は今日の新しい潮流だ

ろう（以上の四層モデルは吉見俊哉氏によるもの）。車内読書はこうした多様なメディア体験の一部なのであり、逆にいえば他のメディア文化とこの箱の中で同居していることになる。同時に、この電車社会は、人と人との触覚を研ぎすまさざるをえない空間だし、聴覚、視覚、嗅覚も全面的に動員されるし、車内飲食を想定すれば味覚にもかかわる、まさに人びとの五感が交響する（あるいは乱反射する）じつに興味深い場である。この時代のメディアと人間感覚の多層的なかかわりが一望できる貴重な箱、それが電車なのである。

こんなわけだから、電車の中の私は、一方では読みたい本、読まなくてはならない本が山積みされている状況からすれば、もっと集中してそれにいそしみたいとも思うのだが、他方では、人の車内読書をふくめて車内空間の読み取りに熱中するという、板挟みにあっている。私の視線はとうぶん落ち着かないまま迷走せざるをえないようだ。だがひょっとしたら、読書という閉じられた精神活動を、現実の方がはるかに越えてしまっていて、時代は人間とその行動に対するもっと深い読みを要求しているのではないだろうか。そうだとすれば、人間研究にかかわるアカデミシャンが本当に読まなくてはならないのは、文字通りの意味での「読書の周辺」なのかもしれない。

（関西大学社会学部教授）

第14回韓日大学出版セミナー参加紀行

朱　弘　均（チュ・ホンギュン）
（韓国大学出版部協会事務局長・建国大学出版課長）

大学出版部における韓日間の交流の十四年という歳月は、もはや短い時間ではない。山河もひとたび変わり、また再び変わろうかという歳月だ（訳注・十年経てば山河も変わる、という言い回しがある）。

日本の大学出版部協会は一九六三年に発足したということだが、わが韓国大学出版部協会は一九七一年にその起こりをたどることができる。一九八二年に韓国大学出版部協会が全国規模の社会団体として正式に発足するや、日本の協会と交流をはじめ、以来一度も欠かさず隔年で相互に訪問しあい、セミナーを開催してきた。この両国共同の努力に、私たちは高い評価を惜しまない。

日本到着と見学

私たち一行十四名は朝九時三十分にソウル金浦空港を出発し、成田空港に十一時三十分の定時に到着した。日本の大学出版部協会の役員三名が私たちを待ち受けてくれていた。その日の午後六時に歓迎晩餐会が開かれた。私はこれで二回目の訪問であるが、日本側が公式の歓迎晩餐会を持ったのは今回が初めてであるらしい。昨年、第十三回の韓国でのセミナー開催時に、日本の訪問団に対して格別な配慮をし、訪韓初日に明洞の料理屋で食事しながら歓談したひとときを、ここ日本で一歩発展させたのかという感じもした。

会場となった銀座のレストランでは日本の協会の山下幹事長をはじめ役員十五名が私たち一行を迎えてくれ、通訳を介した若干の公式儀礼を終えた後、立食パーティーをともにした。お歳を召された数名の部長を除いてはお互いに言葉が通じないもどかしさがあったが、友好的ですばらしい席であったことは間違いない。

二日目の日程は、午前に東京大学出版会を訪問することから始められた。東大出版会の会議室で同出版会の簡単な紹介と現況を聞いた後に、昼食を取りながら、約一時間質疑応答があった。主に東京大学出版会が出版事業をどのように効率化しているのかをめぐるものであり、彼らの卓越

した運営方法は私たちの大学出版部と比べられた。

午後は東京大学出版会の惣塚事業局長の案内を受け、神田の街とトーハン（前は東京出版販売株式会社といった）を訪問した。私たち事務局から訪日前に日本の大学出版部協会に要請した訪問ではあったが、トーハン側でも韓日両国の国旗を会議席上に準備しているなど、細かい配慮があった。

トーハンが出版社と書店間の中間媒介をする比率は日本全域の七〇％を占めているという。私たちとしても羨ましいことで、いま韓国で推進中の出版流通団地も早く完成されなければならないと考えた。システムについては、伝え聞いたこともあったが、全工程が自動化されており、読者と書店からの図書注文、出版社からの販売委託、図書の輸出入、販売代行、週報と広告物による広報活動、書店および読者と出版社のあいだの業務情報交換など、出版社と書店、そして読者にまで本を滑らかに伝達できる一貫したシステムを構築していることを知った。従業員は三二〇〇名であり、その規模面に驚くべきものがあり、日本の大学出版部もみな取り引きしているのである。

韓日大学出版セミナー

訪日三日目は第十四回韓日大学出版セミナーが開催される日である。私たち一行は朝からバスにのり、セミナーが開催される栃木にある喜連川温泉にむけ出発した。団体登録を終え、二時からセミナーが開催された。

参加した役員は韓国側十四名、日本側六十三名で、皆で七十七名だった。日本側の参加者たちの特徴は、大学教授が一名もいなかったことである。わが国の場合出版部の出版部長たちが大部分大学教授で構成されているのとは対照的に、日本の大学出版部は構成員のすべてが一般の職業人による組織になっているためである。言い換えれば、大学出版部の構成員がみな出版の専門人で、人事異動が自分の部署にとどまっており、専ら出版部を生涯の職場として考えている。また協会の幹部のあいだで月に一回定期的に集まりをもち、共同で協会の発展と共同利益活動について論議し、多くの情報を交換しているという。わが国のように担当職務の変動によって協会の職責を負った役員たちが何度も変わったり、またなにか事業を試みようにも担当者が変わって中途で放棄されたり遅延されるようなことはありえない、ということになる。わが国の各大学もまた出版人の専門技能を奨励したり、大学出版部の発展のために専門家の養成はもちろん、長期間自分の力量と信念とを発揮できる、人事異動が慌ただしくない安定した雰囲気をつくらなければと考えた。

日本側の協会幹事長が挨拶を通じて私たち韓国側の参加者を歓迎してくれ、韓国側協会の朴永命（バク・ヨンミョン）会長は挨拶の中で、十四年間の年輪を重ねてきた韓日大学出版部間の友情と和合に賛辞を送って前置きとし、韓

早く措置された。

帰郷学生への利用支援

今回の被災は特に学生に多く、本学の学生三十九名が死亡し、住居を失った学生も多数にのぼる。授業は休講となり、期末試験も多くはレポートの提出になったことにより、多くの学生は帰郷し、または避難先での勉学を余儀なくされた。各国立大学図書館はこれら学生に対する利用上の便宜供与をはかってくれ、多くは当該大学の構成員と同様の扱いとして利用させていただいた。この期間に、神戸大学の学生千六百名が五十余の各地の国立大学図書館を利用した。

受験高校生へのサービス

ちょうど受験時期にぶつかり、勉学の場を失った受験生、学生が多い。これらの被災者に対し大学は施設を提供した。図書館のいくつかの閲覧室を三月末まで、一般の高校生、受験生、大学生のための自習室として開放した。倒壊した開架書架の復旧作業を進めている傍らで勉学する若者で閲覧室は一時期活気を呈していた。緊急時には図書館が果たすべきサービス機能であろう。

神戸大学震災文庫の誕生―三千点余を収集・公開―

建物の補修、倒壊した書架・什器の更新、修繕、補強は順次行われ、ほぼ震災前の状態に復旧した。三月始めにはほぼ従前通りの図書館業務を再開することができた。

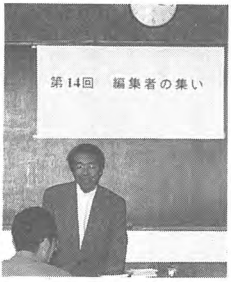
五月、被災地に所在する大学図書館が担うべき責務として、今次の震災後に生産された震災に関するあらゆる文献・資料を可能な限り収集・保存し、提供し、後世に伝えていく事業を開始した。七月からインターネット上で文献リストを世界に公開し、十月から「震災文庫」として広く内外の利用に供している。現在までに収集した三千点余の文献・資料には、チラシ、ミニコミ誌を始め映像資料、電子資料など多種多様な資料も含まれている。この資料群が、今次の大震災の検証や今後の地震研究、防災対策のために役立つことを願っている。

× × ×

今後もふたたび起こりうる大地震に備えて、図書館の被害を出来るだけ最小に止め、より安全な図書館とするために、今回の大震災での教訓を生かしていかなければならない。国立大学図書館協議会は図書館全体の問題として捉えてこの一年、防災と緊急時の対応についてのシンポジウムを開催するなどしてきた。さらに、大学図書館の防災体制、施設・設備の防災対策、災害発生時の即応体制、発生後の図書館間協力体制などについて調査研究するための組織を構成し、大学図書館員により鋭意検討を行ってきた。大震災からちょうど一年、その検討結果はまもなくまとめられる。

（神戸大学図書館事務部長）

大学出版部ニュース



第14回 編集者の集い

▼編集部会「第14回編集者の集い」

大学出版部協会編集部会では、これまで各大学出版部の編集者が共通に抱える課題を学ぶ場として「編集者の集い」を開催してきました。毎回、懇談会や意見交換といった自由なスタイルで行われており、昨年度はＴｅＸ（テフ）についての研究発表会を行いました。

今回は、前回に続く電子出版関連のテーマで、講談社の金子和弘氏（編集デジタルセンター部次長）をお招きし、「編集者から見たＪＩＳ日本語出版規則」という標題の講演会を開きました（11月15日、東京電機大学会議室）。文字コードや行組版規則を始めとした日本語出版の関連規格がＪＩＳで制定中です。氏はこのＪＩＳ委員として、また以前よりメーカー主体の工業規格であるＪＩＳに対して、出版側から発言し続けた数少ない人として活躍されています。日頃の出版活動からは盲点である工業規格という興味深いテーマだっただけに参加者も40名を数え、予定した時間を超えて熱心な質疑が続きました。

▼営業部会副部会長として活躍されていた松岡茂和氏（東海大学出版会）が急逝されました（10月31日）。ご生前のご功績を偲び謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

北海道大学図書刊行会

▼山本文彦著『近世ドイツ国制史研究―皇帝・帝国クライス・諸侯』（Ａ５判・四九四円）近年、ドイツにおいては神聖ローマ帝国史研究が活況を呈し、一九世紀以来の帝国像を根本的に修正しつつある。本書は、近世の帝国の政治原理についての展望を得るべく、一五～一六世紀半ばの帝国の平和の問題を媒介に国制を分析、帝国は平和・法共同体として機能し、近代国家とは異なる政治原理の下に立つものであることを解明する。今後の西欧史研究の基礎を築く、気鋭の力作。

▼馬渡峻輔編著『動物の自然史―現代分類学の多様な展開』（Ａ５判・三〇九〇円）フィールドワークから出発してさまざまな生物学的手法を駆使するダイナミックな学問、それが分類学である。第一線で活躍する一六人の研究者が、体系分類、種分類、系統解析の理論と実際、そしてこれから進むべき方向を具体的に論じる。分類学が書斎的で古典的学問だと誤解している研究者やその卵たち必読の書である。岡田・植田・角野編著『植物の自然史―多様性の進化学』（Ａ５判・三〇九〇円）も好評で版を重ねている。

た幹事会が受け持っている。幹事長、副幹事長、総務、会計、編集、営業、広報、国際、刊行助成など、各分科別に構成されていて、この格言が同時に協会の役員であり実務者であるため、韓国の協会のように理事会と実務委員会とを区分する必要がない。幹事会は東京を主軸として周辺の大学にいる幹事たちで構成されているため、大抵一から二ケ月に一度は定例会議を開催し、必要な場合は特に分科別に会合を持つこともしている。

今回の訪日を通じて、韓国は韓国なりに、日本は日本なりに、自分の大学出版部としての特性と矜持と希望とを持つことができたのではないか。黒字も出しているような日本の大学出版部が持っている利益主義的、または商業主義的発想は戒められるべきだ、という声を全く度外視することはできなかろう。しかし、去年と今年の限られた範囲で私が出会った韓日の大学出版人の双方は、素直なスタンスで友好と交流に向け努力することが必要であることを悟らせた。

両国の大学出版で互いに学ぶべき点を求め、ともに大学の学問と出版の向上に挑むことができれば、私たちは各自の相手国を信頼し尊重できようし、また韓国も日本の発展した出版構造を受容できる基盤を整備することが絶対的に要求されているといえよう。

現在合意されている一九九六年度の第十五回韓日大学出版共同セミナーと合同図書展示会で、私たち韓国側の協会会員校のすべては、今後世界化に向かう韓国の大学出版人として変化しつつある姿勢と努力とを見せなければならないと考えた。

訪日四日目、韓日大学出版セミナーを終えた私たち一行は、朝食を取り、日本の大学出版人たちと記念撮影を終えた後、彼らのすべての歓送を受けてバスに乗りこんだ。国籍や血筋が違っても大学出版人としての道をともに歩むのだなと想うと、困難を分かつもの同士の共感がふと沸いてくるのだった。

大学図書館と阪神・淡路大震災

熊谷　俊夫

一九九五年一月十七日未明、兵庫県南部地方を襲った大地震は、サービス機関である図書館には幸いに利用者がいない時間帯であり、人的な被害は免れたが、建物内部においては惨憺たる被害を被った。

以下に、神戸大学図書館を中心とした被害と復旧およびその後の対応等について述べる。

コンビニエンスストアの棚から商品が飛び出す監視カメラからの映像がテレビ画像で世界に放映されたが、同時刻、図書館内も同様の光景であったであろう。書架が転倒・倒壊し、重量のある製本雑誌や事典・図鑑など大型本が、棚から飛び出して落下、散乱し、利用者がいればそれらが十分に凶器になっていたであろう。

館内の惨状

神戸大学には、灘区六甲台地区に人文・社会科学系図書館など五つの館が、また、中央区楠木地区には医学分館がある。

人文・社会科学系図書館の建物は昭和八年竣工のクラシックな建物で当時の館長室や事務室が開架閲覧室に転用され、三階建ての書庫棟と後に増築した五階建ての管理棟が連結している。建物は目視したところ、ほとんど損傷が無いかに見えた。しかし、後日、専門家の点検調査により書庫内や管理棟の壁面には多数の細かな亀裂が認められ、大幅な補修工事が必要とされた。

開架閲覧室内では多数のスチール製書架が転倒し、あるいは傾斜し、捩じれて壊れている。書架相互の上部の連結が引きちぎられたり、床や壁との固定も引きちぎられているものがある。おびただしい量の図書が床に落下、堆積している。真下に落下するだけでなく、揺れの方向によっては、真横に飛び出して遠くまで落下していた。図書館の書架で、最も被害の多かったのが、スチール製書架である。

一九七八年の宮城県沖地震においても、東北大学はじめ同様のスチール製書架の被害と図書の落下、散乱があったが、今回も、程度の差こそあれ同様の惨状が繰り返された。スチール製書架の耐震性は、現行のＪＩＳ基準（日本

日大学出版部の拡大発展のための推進委員会を構成することを提議した。

テーマ発表は韓国側から始められ、壇国大学の金相培（キム・サンベ）部長が発表した。内容は共通テーマの「学術書の企画と開発」である。日本側からは人文系と自然系に分かれて二人が発表し、特に理工系の部門で東海大学の中陣出版部次長は今後の図書開発企画をスライドを用いて発表し注目を集めていた。片や日本の大学出版部の実務職員たちも韓国側のテーマに関心があったようで、基本的でも深い関心を示すような質問がたくさん出てきて、質疑応答は時間の都合で中断させなければならなかった。

韓日大学出版交流のさらなる推進のために

このところの韓日セミナーを振り返ってみると、短い期間に詰まったスケジュール、主催国がする一般的な行事の数々、意志疎通の難しさ等で、期待したほどの成果をあげることができないでいた。両国の協会から提議した案件も、その場の政治的な発言として終わるのが繰り返しになったとも言える。

これはひょっとすると、今回のセミナーで私たちの協会の会長が提議した韓日交流拡大推進委員会の件も、また形式的発言に終わることになるのではないかと憂慮をした。そこで私たちは日本側の幹事長に、韓日両協会の役員会を開くよう要請した。日本側の山下幹事長もやはり同じ提言をしたかったということで、双方が四名ずつ、通訳を含めて九名が、別室で公式の会合を持つが実現した。代表として韓国側からは協会の会長である朴永命（建国大出版部長）、金相培（壇国大出版部長）、係貴賢（東亜大出版課長）、朱弘均（協会事務局長）、日本側からは山下正氏（幹事長、東大出版会専務理事）、関野利之氏（副幹事長・玉川大学出版部長）、三浦邦宏氏（総務幹事・明星大学営業部長）、中陣隆夫氏（国際担当幹事・東海大学出版部次長）が参席した。

そこでの議題は、昨年の日本側の幹事長の提言と今回の韓国側の会長の提言との中から共通する項目についての実質的協議とすることにした。第一は韓日の大学出版部による合同図書展示会の開催に関すること、第二は両協会の会員校間での図書翻訳に関する特例問題、第三は中国まで含めた韓日中共同セミナー開催問題で、そこまでに限定した。

第一の合同図書展示会の開催問題は、互いに相手国でまず開催させようという意見を出して議論をしたが、先に日本で開催する場合は一九九七年まで延びるということで一九九六年の第十五回韓日大学出版セミナーに近い時期に、まず韓国側で開催することにした。すなわち、一九九六年十月と十一月の間に、韓国で韓日大学出版部合同図書展を開催することを基本にし、出品点数・出品すべき図書の種類・出品図書についての付帯条件など、そのほか具体的に

議論されるべき事項は、両国の実務担当者たちで構成された推進委員会を構成して、書面またはその他の方法で進行させることで合意した。第二の図書翻訳に関する特例問題は、両国が互いに友好的な同盟関係を保ち、大学によっては著作権使用料を無料にしたり、支払うにせよ一般の商取引より五〇％以上の特例を付与することを原則にして、これもやはり双方の役員会でより友好的な方向に向け検討することにした。また、第三の韓日中交流拡大問題は、韓日大学出版部間の実質的交流関係が一層の結実を見たあとでも遅くはないということで認識をともにした。

会議は一時間半ほどで終わった。始終真摯な態度で一貫しており、日本側は私たちが考えていた以上に友好的であった。韓国と日本の大学出版部が各々よい企画とアイデイアを考案し、それらをともに大学出版部の発展に役立たせ、更に拡大発展させていけば韓日大学出版部による共同出版にまでもっていけるのではないか、というのが一致した意見であった。

双方の役員による虚心坦懐かつ実務的だったこの議論を最後に、韓日セミナー訪問日程は皆終わったことになる。

韓日大学出版部が互いに学びあう

結論を言えば、私たち韓国大学出版部は、協会の次元でも、決して日本に劣るものはないということである。いかに日本が経済大国で出版文化が発達していると言っても、大学出版部としてすべき努力に違いはなく、その点わが国の大学出版部にはるかに及ばない日本の大学もあることを知った。協会の活動面でもそうである。韓国とは違い、一般職員による構成でもって、固定した人員が協会の活動全般を導いている点が日本側協会の構造的特徴である。私たち韓国大学出版部協会が、実務委員たちで試みた三回の大学出版部合同の図書展示会のようなことは、日本では考えられない重要な業績だと称賛を受けた。韓国の協会が行っている、定例理事会、実務委員会を主軸とした大学出版人研修会、協会報の発行、大学出版部の合同図書目録の発行などなど、敏捷さを欠くことが構造上矛盾であるとはいえ、日本の協会以上の活動をしていることはやはり自負したい。

むろん私たちが日本の活動を手本にしなければならない事項も多くある。例えば日本では各種文化財団から図書刊行基金の支援を受けていること、会員校から発行されている新刊図書が約七十の公共図書館に無条件に納品されているなど協会が結束していること、そして協会が新刊速報を定期的に約三五〇〇部発行し、一三〇〇余りの図書館と二二〇〇の書店とに配布して販売を促進させ、毎年一月には新刊目録を発行して大型書店に発送していることなどは、私たちの協会の実務委員会でも直ちに推進しなければならないことである。

日本の大学出版協会の実務的運営は、十一名で構成され

工業規格）で震度五程度とされているのにも要因があろう。震度七程度への耐震基準の強化改正が速やかに望まれる。また、同時に床や壁面との固定の方法についてもより吟味が必要であろう。

三階建て六層からなる書庫内の積層書架は、建物と一体となって床と天井に結合されており、書架そのものの被害は少なくその強さと安全性は実証された。しかし、最上層の書架は天井に連結していなかったため大きくひしげていた。書庫内も図書の落下、散乱が多い。

神戸大学図書館・開架閲覧室

集密書架は、揺れの方向によって脱輪や電気系統の故障、側板の歪みがあったが、棚が相互に接しているだけに、図書の落下はきわめて少ない。設置場所、床構造、揺れの方向や収納物によっても影響されたようだが、比較的最近の製品は免震性が改良されており被害が少なかった。

荘厳な大閲覧室は、高い天井、ステンドグラスの天窓、八人掛けの厚い木製の大閲覧机が並んだ百六十座席の閲覧室である。その重い大閲覧机は揺れと同時に一斉に移動し、ほぼ元の位置に戻ったところで止まっていた。被害は皆無であった。近年の大学図書館は、開架式閲覧室が一般的で、書架と閲覧机が同居しており利用上は機能的であるが、今回の震災の経験から安全面を考えれば、旧来の専用の閲覧室と書庫からなる方式の再考も必要ではないかと思われた。

× × ×

学内で最も多くの学生が集まる国際・教養系図書室の広い開架閲覧室に入ると、ドミノ倒しのように書架が軒並み転倒し、図書が落下、堆積している（写真）。開館時間中であれば相当の人身被害がでていたところである。背の高い複柱式の書架（物品棚状）が参考図書など重い図書を収納したまま位置を移動して止まっている。この種の書架にほとんど転倒や傾斜、図書の落下はなかった。

懐中電灯を手に二階建て六層の書庫に入る。図書館運営委員の教授が立ち会う。書庫内の入口付近には十一段の書架から落下した図書が腰の高さまで堆積し、乗り越えねば中に進めない。躊躇しつつ土足で乗り越えて入る。文系の教授にとっては土足で書物の上を踏み越えていくことは、おそらく、踏み絵を踏む心地であったであろうが、教授は意を決して私のあとから続いて書庫内に入ってこられた。図書館運営委員としての責任感がそうさせたのであろう。

百万冊の図書が落下

落下した図書の数は、平均して書架上のおおよそ四割位と推定された。神戸大学全体で二百五十万冊の蔵書があることから約百万冊もの図書が散乱したことになる。被災地区の各大学でもほぼ同様に四～五割の落下が多かったようである。一部の図書は、表紙が破れ、頁がちぎれたり、給水装置からの漏水で水をかぶったものも少数ある。しかしそれ以上に、学生への貸出中の図書が住居の火災や倒壊により失われたものが多かった。

教官の研究室も図書館と同様の被害で、室内の書棚や什器類が倒れ、内側に開くドアが開かなくなり、内部に入ることさえ出来なかった室も多い。

ボランティアと復旧支援

地震から一夜明けた早朝、大学付近の道路で六甲山方面から下りてくるひとりの若者にあう。付近はいつもは通勤通学の人や車で賑わうが誰も通っていない。長髪にヘアバンド、ジーンズ姿の若者が異様に見えるのは、肩に天秤棒を担ぎ前後に大きなビニール袋をぶら下げているその姿からである。すれ違う際に声をかけられ一瞬驚く。が、次の瞬間、全てが理解できた。かれから「王子公園」へゆく道を尋ねられたのである。夜通し放映していたテレビで、住むべき家を失い、余震の恐怖に怯える市民が王子公園に集まって立ち尽くし眠れぬ夜を過ごしている映像をみて、かれは家を飛び出し、自動販売機で缶ジュースなど買い、ビニール袋に詰めれるだけ詰め、歩いて山を越えてきたのに違いなかった。まだボランティアということばがマスコミでも活字にならないこの時点で、被災地の救援に向かう若者がいるということを知り思わず感涙した。被災者の何かを救援しようとする気持ちはその時全国のだれもが同じであったろう。

本学図書館にも多くの大学図書館から復旧作業のための支援の申し入れがあった。二次災害の危険が少なくなり、ライフライン、交通などもある程度復旧した時期を待って、二月中旬、まだ復旧作業の残っていた国際・教養系図書室の書架の復旧作業と落下図書の配架作業に十一大学延べ四十五名の図書館職員を派遣していただいた。

利用面での大学図書館の支援

全国九十九の国立大学の図書館は国立大学図書館協議会という、連携と協力のネットワークを構成しており、日頃から各種の相互協力関係を結んでいる。当館の事務機能が失われ、外部との連絡も不便となった。各大学への連絡機能と被災地区の大学の教官、学生に対する図書館利用面での支援方を協議会に依頼した。協議会事務局から全国立大学図書館に対し、被災地区の図書館への協力依頼の文書がファックスにより送付された。

学術情報センターの NACSIS-ILL という大学図書館間の文献複写と相互貸借のオンラインシステムはセンターの操作により被災地区の大学へ申込みがなされないよういち

聖学院大学出版会

▼大木英夫著『主の祈り』（定価一九〇〇円）〈ヴェリタス叢書①〉を発売しました。▼祈ることを知らない、祈ることが出来ない……二〇〇〇年前も現代と同じような情況だったのでしょうか。「祈ることを教えて下さい」と切実に願う弟子に対して与えられたキリストの『主の祈り』を一句ごとに講解した書です。キリスト教的世界観が、この『祈り』を祈ることの中に現れていることを解き明かしています。

▼ところで小会では、ヴェリタス叢書（四六判並製）刊行いたします。年に二点ほどの刊行を目指しています。ヴェリタス Veritas とはラテン語で真理の意味です。〝真理は自由を得させる〟とは国連の入口にも記された新約聖書の有名な言葉ですが、この人間に自由を得させる〝真理〟を常に追い求める、特に若い学生諸君への一助になればと願っています。

慶應通信

▼『近代東アジアの政治変動と日本の外交』（波多野勝著・三八〇〇円）大正中期ごろまでの東アジアでの日本の発言力が急上昇した時代、日本外交史上に登場した多くの問題――フィリッピン独立、北清事変、日韓併合、中国革命などにおける日本の対応プロセスの研究である。特に中国の辛亥革命、第二・第三革命などに対する日本の政策決定にさいして、政府または在野のいかなる人々がイニシアティヴをとっていたのか等、膨大な資料にもとづいて行われた近代日本政治史の貴重な研究である。

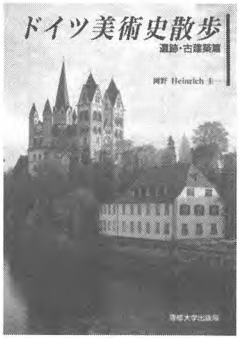
▼『財務管理―テキスト及びケース』（鈴木貞彦著・三五〇〇円）財務管理とは株主資本価値の最大化をめざして、将来の利益とキャッシュ・フローを生み出すための意思決定を現時点において行うことである。このような性格の決定を行うためには、テクニカルな知識の集積のみでなく、実際のケースに取り組むことが有効な訓練方法である。本書はこの目的にそった、ケース分析のための八章のテキストと三編のケースを収録しており、ケースブックとして実用価値が高い。

産能大学出版部

▼『戦略策定概論』（波頭亮著、二二〇〇円）平成不況に見舞われた日本企業では、同一業種でも企業により収益に大きな差がみられる。企業戦略が収益構造に大きく影響している証拠である。本書はその企業戦略立案に必要なすべての理論を体系的に組み上げたものである。ポーターの競争戦略、コトラーの四つの競争地位から始まり、企業戦略の中心となる製品市場戦略、マーケティング戦略、また各種の機能別戦略を網羅する。かつて実際に実行され、成功した戦略、失敗した戦略などのケースを豊富に取り入れ、ビジネスマンなら誰でも興味深く理解できるよう工夫されている。▼『世界最適生産の企業戦略』（土井秀生著、三〇〇〇円）日本の製造業の海外生産比率は七・四％、米国二五・一％、ドイツ一九・六％。――長期的な円高傾向、貿易摩擦の激化、国内の物づくりのコスト競争力の消失などを考えると、海外での生産比率はいっそう増大することは確実である。このような企業のグローバル化にあたって、確かに戦略は欠かせない。本書はそれに答えた唯一のものである。

専修大学出版局

▼岡野 Heinrich 圭一著『ドイツ美術史散歩 遺跡・古建築篇』(定価二五七五円)▼天に伸びる巨大な双塔……ケルン大聖堂は、ゴティック建築の傑作としてあまりにも有名だ。だがそのほかにも、ドイツには魅力的な建築や、古代ゲルマニアを偲ばせるような遺跡が数多く残されている。それらを時代(様式)ごとにまとめたのが本書である。▼ネアンデルタール人の化石が発見された洞窟から、ロマネスク様式のシュパイヤー大聖堂、そしてケルン大聖堂に至るまでを著者自身が歩き、歴史学的・美術史学的観点から論ずる。同時に、旅の途上でのエピソードも織り交ぜて記し、読みやすさと学術性をバランスよく兼ね備えている。読む者をドイツ文化の旅にいざなう好著である。



ドイツ美術史散歩

玉川大学出版部

▼木田宏著『学習社会の大学』(二四七二円) これからの大学はどのように変化してゆくのだろうか。また大学は社会の中でどのような役割を果たすべきか。社会全体が大きな転換期を迎えている現在、胎動を始めた大学改革の中に近未来の大学像を探る。▼W・B・カーノカン著/丹治めぐみ訳『カリキュラム論争』(二四七二円) アメリカ大学のカリキュラムは、歴史観、市民社会の理想、ジェンダー、人種、民族問題などを反映しており、アメリカの教育と文化の粋といえる。本書では、継続中の激烈なカリキュラム論争の現状を過去に遡って検証し、古典派と近代派の間で繰り返されてきた書物戦争という観点から問題の本質を解きあかそうとする。

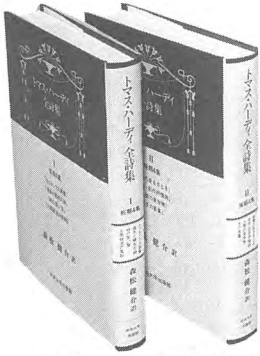
喜多村和之
『人は学ぶことができるか』

中央大学出版部

▼白羽祐三著『民法起草者 穂積陳重論』(三三九九円)

民法起草者として穂積が帯有していた「お上と下下の法意識」(天皇制法思想)の解明をとおし、かれが社会主義法思想との関係で自己の法意識・法思想をどのように展開し、民法典論争史でいかに具現していったかを検討したものである。▼森松健介訳『トマス・ハーディ全詩集』全二巻(Ⅰ四六三五円/Ⅱ五六六五円)

大小説家ハーディは既知のことであるが、詩人としては関心度も低くその全貌の紹介も遅れていた。本書は彼の全八詩集(他に処女詩を含む)計九一九篇の全訳であり、わが国初訳となる三百数十篇のほか、従来の日本における受容を改めたと自負する作品も約三〇〇篇を収載。



トマス・ハーディ全詩集

東海大学出版会

▼『地球の成立―その地質発達史』舟橋三男著

「近頃は、地質学の伝統を忘れ、野外研究を軽視し、もっぱら室内で目新しい器械をもてあそぶ、といった地質学が流行し、学界やジャーナリズムを賑わしているように見うけられます。

このようなおり、数十年にわたり北海道の日高山脈の地質構造を、多くの仲間と、野外調査を基礎にして、岩石学的に研究してこられた舟橋三男氏のライフワークが上梓されたこと、大きな意義をもっていると思います。

このところ、古生物学ばかりに目が向いていた筆者も、本書によって、改めて地質学の伝統・地球の歴史・大地に根をおろした地質学を勉強しなおしたい、と思っております。

自然を愛好する各方面の読者も、ぜひ本書をひもといて、地球の眞の姿にふれていただきたいと思います。」

（井尻正二先生の推せんのことばより）

▼山下昇編著『フォッサマグナ』が、「第十一回日刊工業新聞　技術・科学図書文化賞」に選ばれました。ぜひ図書館に。

東京大学出版会

▼『活断層とは何か』池田安隆・島崎邦彦・山崎晴雄著（一八五四円）

昨年一月に起こった兵庫県南部地震は、淡路島から神戸・阪神地区に甚大な被害をもたらした。原因となった「活断層」という言葉が一気に注目を集めたが、その活断層とはいったい何なのか、地震とどんな関係があるのか、またどのように危険なのか、今後どう対策を考えていけばよいのか、などがわからず、不安に思っている人も多いだろう。

本書は、『日本の活断層』をまとめた活断層研究会の中心メンバーが、具体例をもりこみながら、正確にわかりやすく書き下ろした活断層の解説書の決定版である。活断層と地震についての理解を深め、広く防災に役立ててもらえればと願っている。

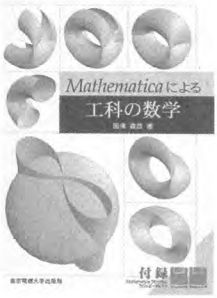
目次

1 地震はなぜ起こるのか
2 活断層とは何か
3 活断層をどう見つけるか
4 活断層から何がわかるか
5 活断層が起こした地震災害
6 研究・教育・防災をどう進めていくか

東京電機大学出版局

▼ワープロソフトの機能が向上し、業務用のＤＴＰシステムにひけを取らないレベルである。またプリンタの普通紙出力も高精細となり、印刷並の美しさである。英文の理工系学術書では以前より試みられていたが、最近和文出版物でも、ワープロで組版し普通紙出力を原寸のまま版下とした出版が行われている。少部数の学術専門出版の場合、印字品質とコストのバランスは一考に値する。

▼著者が数式処理ソフト Mathematica とワープロを利用して、画像から数式までを組んだ原稿を、編集者が千二百ドットの普通紙出力により版下とした。脱稿から三週間、フロッピーディスク二枚を付けても通常の定価で発行ができた。



Mathematica による工科の数学
田澤義彦著　Ｂ５判　定価2400円

東京農業大学出版会

▼『大隈重信の余業』　針ヶ谷鐘吉（定価二〇〇〇円）

この本の主題は、大隈重信侯ではあるがタイトルにもあるとおり、〝余業〟であって政治家大隈重信でも、早稲田大学創設者としての顔でもない。重信侯の庭園や園芸に関することが主題なのである。

重信侯が庭園や園芸に造詣が深かったことは、「日本園芸会」の会長を長く努めていたことでもわかる。時代は、明治維新から大正にかけての時代。西洋文化が徳川三百年の歴史に履いかぶさろうとしていた時でもある。時代の先端に生きていた侯が、西洋文化のすばらしさに感動し、それを庭園に取り入れようとしたことは、今になってみると、まったく当然のことのように思われる。

築地ホテル館の庭は、とくに重信侯が好んだ庭だったようで、しばしば、このホテルに訪れている。また、重信侯の邸宅は、純洋風建築にふさわしい芝庭が造られてもいる。激務の中で、心を喩してくれる庭園、四季の変化を伝えてくれる植物に限りない愛情をそそいだことにも侯の人間的な大きさがうかがえる。

法政大学出版局

▼石井謙治著『和船』全Ⅱ巻が、第49回一九九五年度毎日出版文化賞を受賞した。著者は和船研究によって、すでに本年度吉川英治文化賞を受賞した海事史研究の第一人者である。

▼叢書〈ものと人間の文化史〉の一冊として一般読者を対象に書かれた本書は、内航海運王国を築いた弁才船＝千石船をめぐる通説の誤りを正すとともに、遣唐使船から遣欧使節船、幕末の洋式帆船まで、日本史上の著名な船を紹介しつつ、その構造と技術・性能、エピソードを興味ぶかく語る（カラー各巻8頁）。

逆風帆走する明治時代の弁才船

四六判上製／Ⅰ二九八七円Ⅱ二四七二円

放送大学教育振興会

▼『新版　博物館学Ⅱ』（定価二二七〇円）

博物館は、市民社会にとって欠かせない存在だが、単なる保存展示の場ではなく、市民のニーズや社会の変化に合わせて成長していく必要がある。そのために必要な多面的な機能や活動、今後の課題を具体的に考察している。たとえば、地域文化の創造に結びつく博物館のネットワーク化、ヨーロッパの博物館とそれを支える成熟した市民社会、欧米で多数建設されている「子ども博物館」の意義にふれ、博物館機能の基礎である資料の収集と保存の仕方、学芸員の仕事内容、効果的な展示方法など、具体的な技術論も展開している。本書を一読してから博物館を訪れてみると、新しい世界がひらけてくることうけあい。

▼平成八年三月刊行予定の図書は七十六点。トータルで三百名近い執筆陣は、取材に、脱稿に、校正にと大忙し。あわせて同じ内容の授業用のテレビやラジオの番組の収録もあるので、執筆陣の忙しさにさらに拍車がかかる。それでも海外ロケは積極的に敢行している。

明星大学出版部

▼小部は、昭和五十年七月、明星学苑の教育理念を大前提に、明星大学の学術・研究書の刊行と、広く一般の学術文化に出版を通して貢献することを目的に設立され、本年で二十年目を迎えた。

出版部の出版方針として、まず大学での教育に使われるテキストの発行に重きを置き、出版活動を行っている。現在までに「大学講座」「小学校教職講座」「講義ノート」を中心に二〇六点を発行し、順調に業績を上げてきた。

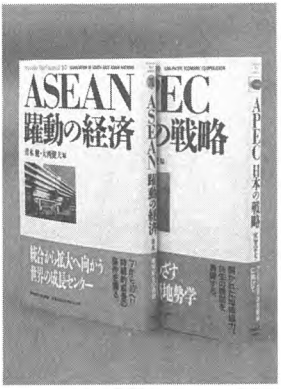
このたび長年にわたって出版活動を指導してこられた児玉三夫明星大学総長が代表取締役社長を勇退され、塚田紘一取締役が社長に就任した。

▼森下恭光・佐々井利夫共著『増補　道徳教育の研究』は、大学の教職課程の中に設けられている「道徳教育の研究」という科目のテキストとして執筆されたものである。内容の概略を述べれば、道徳教育の意義と必要性、道徳教育の可能性明治以降の道徳教育の展開、また付録として道徳教育のための手びき書要綱、小学校・中学校学習指導書要領等が収められている。一月刊行予定。

早稲田大学出版部

▼『南総里見八犬伝稿本㈣』の最終配本（九五年一二月）をもって、『早稲田大学蔵資料影印叢書　国書篇』第一期～第三期全48巻（揃定価七七万六二二〇円）が完結した。早稲田大学が所蔵する国文学、国語学等の貴重資料を12年にわたって公刊し、好評を得てきた。この機会にぜひセットでのご購入をおすすめします。

▼「ワセダ・リブリ・ムンディ」シリーズ⑲『ＡＰＥＣ日本の戦略』（宮智宗七・大西健夫編、定価二八〇〇円）、⑳『ＡＳＥＡＮ躍動の経済』（青木健・大西健夫編、定価二八〇〇円）を刊行した。⑲は開かれた地域協力をはかるＡＰＥＣの全容を鳥瞰し、⑳は拡大へ向かうＡＳＥＡＮの持続的成長の条件を検証する。



名古屋大学出版会

▼Ｖ・パレート著／姫岡勤訳・板倉達文校訂『一般社会学提要』（定価八二四〇円）人間行動の合理と非合理を凝視して「ファシズムのマルクス」とも称されたパレート。本書は二十世紀思想界に異彩を放つパレート畢生の大著『一般社会学概論』の著者自身による縮約版の再刊。

▼竹本洋著『経済学体系の創成―ジェイムズ・ステュアート研究―』（定価六四八九円）Ａ・スミス『国富論』に先立つ最初の経済学体系『経済の原理』全編のわが国初の本格的研究。創成期経済学の宿す豊かな内容と可能性を示す。

▼東晋次著『後漢時代の政治と社会』（定価八七五五円）貴戚政治・士大夫豪族察挙体制等の考察を通じて、皇帝支配のあり方と地方社会の変容とを総体的に把握、中国伝統社会の原型が後漢時代に形成されたことを明らかにする。

▼若尾祐司著『近代ドイツの結婚と家族』（定価五九七四円）市民的結婚の法制化、結婚行動と家族形成の実態、女性運動による結婚・家族批判、の三つの視角から、一九世紀ドイツにおける「結婚の社会史」に迫った労作。

京都大学学術出版会

▼『類型学序説―ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』山口　巖著

旧ソヴェトで長い歴史をもつ言語研究における類型学の流れを中心に、その流れをうけた比較言語学の変化にも触れた論考である。言語表現の技法を扱う「型式的類型学」から出現し、近年注目されているのが「内容的類型学」である。それは一つの言語と他の言語とに共通する「くせ」が言語の類型と深くかかわり、構造的に意味をもっていることを主張する。研究の日が浅い日本に、従来の類型学の精密化の過程を概観しつつ「内容的類型学」を本格的に紹介し、パラダイムシフトを迫る、わが国初の成書である。

▼『The Emergence of the 'Abbasid Autocracy』余部福三著

アッバース朝を中心とした8世紀から10世紀半ばにかけての国家体制と社会の変動を、辺境の重要性と、特にその軍隊に着目しながら論じる。膨大なアラビア語史料を多数の註記に引用したうえで、また、ローマ史とも比較しながら、初期イスラム史全体の展望に立った大きな視野で描かれた緻密な研究書である。

大阪経済法科大学出版部

▼吉田勝次著『台湾市民社会の挑戦』（定価二五七五円）今年の台湾地方選挙における野党民進党の躍進、台湾問題をめぐる米中関係、九六年三月台湾大統領選挙等々、昨今何かと世界の耳目を集めている台湾である。本書は、台湾型権威主義体制の民主政（あるいは土着の準権威主義体制）への移行期の諸問題を理論的・歴史的に鮮明にするとともに、最近五ヵ年の政治過程を人物論まで含めて分析し、台湾の未来を展望する。▼武者小路公秀編『日本外交の課題と選択』（定価二七八一円）政、学界、言論の第一線で活躍する二七人のメンバーによる国際問題研究会の成果をまとめたもの。憲法の平和主義の原則に立脚しつつ、混迷する世界の中の日本外交の課題を鮮明にし、その選択について積極的に政策提言する。第一章日本の安全保障を考える　第二章東アジアの変化と日本外交の課題　第三章冷戦後国連の役割と日本の選択　第四、五章戦争責任・戦後保障と日本の選択　第六章東アジアの経済協力と日朝関係　第七章アジア・太平洋における地域統合　第八章アジアの記者のみた日本

関西大学出版部

▼吉村秀幸・中村則之訳『英語にみる性とことば』（定価一七〇〇円）70年代中ごろ「言語から性差別へのアプローチ」の提唱が行われた。本書はそれ以降十年間の実験、研究を読みやすい形でまとめた。女性の名字、女性の話し方、女性への呼称、女性を表す表現、今後の予測から構成される。英語学や言語学、女性学、時事問題に関心がある読者向け。▼池田進著『人の顔または表情の識別について（中）』（定価四五〇〇円）最近、顔の認識をめぐる研究は各種の領域で急速に進歩している。本書は最近の研究の進展と動向を網羅的に展望し、表情や個体を識別するための手がかりとしての顔の特徴とは何かをめぐり具体的に展開する。▼萩野脩二著『中国〝新時期文学〟論考―思想解放の作家群―』（定価五〇〇〇円）作家自らが身体的に自由になれた文革後の十年の中国文学を〝新時期文学〟という。この点を出発点に、作家たちの用語や世代の問題などを「作家と表現」「動向」「書評およびその他」の三部に分けて論考する。この時期を扱った初めてのまとまった論考。

九州大学出版会

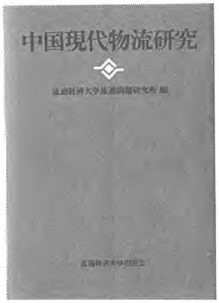
▼九州大学法学部創立七十周年記念論文集『法と政治―二十一世紀への胎動』（上下巻各七二一〇円）「…幾多の個別研究対象の広がりにもまして、問われているのは新たな世界像であり、そこには学問方法自体に対する問い掛けも含まれている。…法学・政治学研究は今、ひとつの転機にたっている。…本論集は政治学・基礎法学を中心とする一冊と公法学・私法学を中心とする一冊の二分冊を以て編まれるが、この区分すら容易でないところにこんにちの学問状況が示されている。」（巻頭のことば」より）▼経済工学シリーズはこれまで十冊余の公刊をみて高い評価を得てきている。ここに「第二世代」の研究スタッフ陣によって、第2期経済工学シリーズの刊行を開始することにした。第一巻、朱保華『投資関数の理論』（三六〇五円）▼金龍瑞『日韓関係の再構築とアジア』（四一二〇円）「東アジアにおける日本との安保協力を中心的な課題とする両国関係のありかたが探られ…自己批判が苦手な国同士の協力を考える上で示唆するところが多い。」（「毎日新聞」10・30書評より）

流通経済大学出版会

流通経済大学流通問題研究所編

▼『中国現代物流研究』（A5判・二九九頁・二八〇〇円）

中国経済は、いままでの計画経済を、市場経済化の方向に路線転換してから、経済成長の進展は著しい。成長地域も、当初の沿岸部から、次第に内陸農村部へと拡がり、物流の整備が緊急の課題となってきている。この課題に対し、流通経済大学流通問題研究所と学術交流協定校である北京物資学院とで現地調査と共同研究を実施した。本書は、日本側の研究成果を取りまとめたものである。内容は、物流関係法規、陸上輸送、水上輸送、航空輸送、港湾、倉庫、農産物流通、商的流通、要員育成など物流に関する分野の全般にわたって論述されている。



大阪大学出版会

人文・社会・自然科学の三分野からそれぞれ良質の専門書が誕生した。平成8年度の出版計画を想する際は、分野のバランスはもちろん、教科書や教養書といった側面も加味してゆきたい。

▼村田路人著『近世広域支配の研究』（定価七五〇〇円）　畿内非領国地域における広域支配の実態と特質を豊富な史料で考察。役請負人と用聞（ようきき）という著者独自の研究を通じ、一方的かつストレートなものとしてみてきた従来の近世支配観に修正を迫る。

▼新開陽一著『日本経済のマクロ分析』（定価二八〇〇円）　マクロ理論経済学の第一人者が、石油危機後の日本経済と抱えている諸問題を分析。また円高ドル安と国際協調、貿易黒字、アメリカの圧力とバブル発生などのトピックスにも学問的背景のもとに論及する。

▼中川正澄著『アヌレンの化学』（定価一〇、三〇〇円）　理論と合成が見事にかみ合って整然とした体系がぎすかれたアヌレン化学を概観し、著者の輝かしい成果も交えて、内外の研究を集大成した世界に類例のない画期的な労作。

新刊案内 '95・10〜'95・12

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会
Tree Sap-Proceedings of 1st International Symposium on Sap Utilization　寺澤　實他編　八二四〇円
近世ドイツ国制史研究—皇帝・帝国クライス・諸侯　山本　文彦　四九四四円
図説　社会性カリバチの生態と進化　松浦　誠　二〇六〇〇円
動物の自然史—現代分類学の多様な展開　馬渡　峻輔編著　三〇九〇円

■聖学院大学出版会
主の祈り—キリスト入門　大木　英夫　一九〇〇円
日本プロテスタント史の諸相　高橋　昌郎　編著　六六〇〇円

■慶應通信
近代東アジアの政治変動と日本の外交　波多野　勝　三八〇〇円
財務管理　鈴木　貞彦　三五〇〇円
いま「人間」とは—人間観の再検討—〈日本倫理学会論集30〉　日本倫理学会編　三二〇〇円
下級審商事判例評釈（昭和五〇年〜五四年）〈慶應義塾大学法学研究会叢書58〉　慶應義塾大学商法研究会編著　八六五二円
下級審商事判例評釈（昭和五五年〜五九年）〈慶應義塾大学法学研究会叢書59〉　慶應義塾大学商法研究会編著　八二四〇円

■産能大学出版部
企画書のまとめ方　和田　創　一六〇〇円
住宅産業とPL法　林田学・三島俊介　一六〇〇円
私はこうして社会保険労務士の資格を取得した　小嶋経営労務事務所社労士試験研究会　一六〇〇円
今、グローバル・コミュニケーションのとき　浦野　啓子　一五〇〇円
「プラス思考の習慣」で道は開ける　阿奈　靖雄　一五〇〇円
住宅をアタマで売る本　三島　俊介　一八〇〇円
米・日バーチャルビジネス最前線　三石玲子・滝沢哲夫　一六〇〇円
世界最適生産の企業戦略　土井　秀生　三〇〇〇円
たとえ破産しても人生はやり直せる　吉岡　貞嘉　一五〇〇円
はじめての営業　国司　義彦　一五〇〇円
戦略策定概論　波頭　亮　二二〇〇円
ビジョンガイドによる「目標による管理」作例で読むPLを超える広告表現　産能大学MBO研究会　二〇〇〇円　山田　理英　二六〇〇円

■専修大学出版局
ドイツ美術史散歩　遺跡・古建築篇　岡野　Heinrich　圭一　二五七五円

■玉川大学出版部
キャリア教育の理論と実践　福地　守作　四三二六円
学習社会の大学　木田　宏　二四七二円
表象理論とヘルバルト　浜田　栄夫　五九七四円
人は学ぶことができるか—教師と弟子—　喜多村和之　四九四四円
カリキュラム論争—アメリカ一般教育の歴史—

W・B・カーノカン／丹治めぐみ訳　二四七二円
幼児保育制度の発展と保育者養成　岩崎次男編　一一三三〇円
愛知県人と名古屋人―続・人間の地理学―　浅井得一　一五四五円
消える籠職人―竹編みの手業―　吉羽　和夫　三七〇八円
書剣もて風塵に老ゆ―わたしの歩んだ道―　川崎　源　三五〇二円
授業をどうする！　香取之助監訳　一五四五円
新版　文章構成法　森岡健二監修　一五四五円

■中央大学出版部
制度の経済学　酒井邦雄・寺本博美・吉田良生・中野　守編著　四一二〇円
トマス・ハーディ全詩集Ⅰ〈前期4集〉　トマス・ハーディ／森松健介訳　四六三五円
トマス・ハーディ全詩集Ⅱ〈後期4集〉　トマス・ハーディ／森松健介訳　五六六五円
民法起草者　穂積陳重論　白羽　祐三　三三九九円
国際外国為替法　下巻　ヴェルナー・F・エプケ／山内惟介監修／實川和子訳　五四五九円

■東海大学出版会
地球の成立―その地質発達史―　舟橋　三男　一五四五〇円
地球の歴史〈新版地学教育講座⑦〉　地学団体研究会編　二五七五円
気象と生活〈新版地学教育講座⑮〉　地学団体研究会編　二五七五円
英文　膝蓋軟骨軟化症　今井望・戸松泰介　八二四〇円
現代生態学とその周辺　沼田　眞編　三〇九〇円
社会的自己実現の教育　甲斐　進一　四四二九円
授業をどうする！　香取元助監訳　一五四五円
新版　文章構成法　森岡健二監修　一五四五円

■東京大学出版会
記憶〈認知心理学2〉　高野陽太郎編　三五〇二円
コメ〈東京大学公開講座61〉　二六七八円
講座世界史5―強者の論理―　帝国主義の時代　歴史学研究会編　二四七二円
燃えあがる海―湾岸現代史〈中東イスラム世界5〉　高橋　和夫　二五七五円
教養の日本史〔第2版〕　竹内　誠他編　二〇六〇円
日本中世の社会と法―国制史的変容　新田　一郎　五七六八円
イギリス道路行政史―教区道路からモーターウェイへ　武藤　博己　五九七四円
行為と社会システムの理論　富永　健一　三二九六円
制度資本の経済学　宇沢弘文・國則守生編　三九一四円
金融システムと情報の理論　藪下　史郎　三九一四円
Tsutsugamushi Disease　川村明義他編　一二三六〇円
枢密院会議議事録85・昭和篇43　国立公文書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇67　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇93　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第五編之五　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
大日本史料　第十二編之五　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
講座世界史6―必死の代案　期待と危機の20年　歴史学研究会編　二四七二円
文明としてのイスラム
―多元的社会叙述の試み〈中東イスラム世界6〉　加藤　博　二四七二円
表現者として育つ〈シリーズ学びと文化5〉　佐伯　胖・藤田英典・佐藤　学編　一八五四円
知覚と運動〈認知心理学1〉　乾　敏郎編　三五〇二円
刑法各論講義〔第2版〕　前田　雅英　三九一四円
アジアからの視線
―日系企業で働く一万人からみた［日本］

自由と自由主義—その政治思想的諸相　佐々木　毅編　七七二五円
フランス文学史　田村　毅・塩川徹也編　四三二六円
新編　史記東周年表—中國古代紀年の研究序章　平勢隆郎編著　三六〇五〇円
リモートセンシングからみた地球環境の保全と開発　村井俊治・宮脇　昭・柴崎亮介編　三九一四円
博物館学—フランスの文化と戦略　西野　嘉章　二四七二円
海洋民族学—海のナチュラリストたち　秋道　智彌　三九一四円
文化学術立国をめざして—国立大学は訴える　国立大学協会編　三六〇五円
枢密院会議議事録86・昭和篇44　国立公文書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇68　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇94　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第五編之六　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
大日本史料　第十二編之六　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
言語〈認知心理学3〉　大津由紀雄編　三五〇二円
刑事法入門　木村　光江　二二六六円
増補　日本政党政治の形成—原敬の政治指導の展開　三谷太一郎　五五六二円
生活時間の社会学—社会の時間・個人の時間　矢野眞和編者　四一二〇円
経済開発と途上国債務　寺西重郎　三六〇五円
沖縄の都市と農村—復帰・開発と構造的特質　山本英治・高橋明善・蓮見音彦編　七八二八円
東トルキスタン共和国研究—中国のイスラムと民族問題　王　柯　七六二二円
大規模水田経営の成長と管理　和田照男編　八二四〇円
DNA複製とその制御—細胞増殖とがんを理解するために　松影　昭夫　三二九六円
枢密院会議議事録87・昭和篇45　国立公文書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇69　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇95　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第五編之七　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
大日本史料　第十二編之七　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円

■東京電機大学出版局
高分子合成化学〈物質工学講座〉　山下雄也監修　四六三五円
電気・電子計測〈基礎テキスト〉　三好　正二　二七八一円
〈新・数字とコンピュータシリーズ5〉　片桐重延監修　一九五七円
数値計算　若山芳三郎　一五四五円
高校生のためのC　小山田了三　二七八一円
未来材料入門　杉山　行浩　二二六六円
Cで学ぶデータ構造とアルゴリズム　足立　暁生　一八五四円
チューリングさんの贈りもの—コンピュータサイエンス入門　若山芳三郎　一七五一円
学生のための構造化BASIC　針ヶ谷鐘吉　二〇〇〇円
Mathematica による工科の数字—フロッピーディスク2枚付　田澤　義彦　二四〇〇円
形式言語理論入門〈情報科学セミナー〉　西野　哲朗　三二九六円

■東京農業大学出版会
大隈重信の余業　P・ヴェーヌ／鎌田博夫訳　三九一四円

■法政大学出版局
古代ローマの恋愛詩—愛と詩と西洋—
証人—言葉と科学についての省察—

時間を読む　E・シャルガフ／山本尤・内藤道雄訳　二八八四円
人生の意味―価値の創造―　M・ピカール／寺田光徳訳　二九八七円
現代世界を読む―スタイルとイメージの時代―　I・シンガー／工藤政司訳　一七五一円
認識論のメタクリティーク　M・マフェゾリ／菊地昌実訳　二一六三円
技術―クリティカル・セオリー―　Th・W・アドルノ／古賀徹・細見和之訳　四一二〇円
大いなる体系―聖書と文学―　A・フィーンバーグ／藤本正文訳　五四五九円
音楽のはじめ　N・フライ／伊藤　誓　訳　四九四四円
反ニーチェ―なぜわれわれはニーチェ主義者ではないのか―　C・シュトゥンプ／結城錦一訳　二四七二円
地獄のマキアヴェッリ　L・フェリー、A・ルノー他／遠藤文彦訳　三九一四円
スポーツと文明化―興奮の探求―　S・グラッティア／田中治男訳　二九八七円
修羅の渚―宮澤賢治拾遺―　N・エリアス、E・ダニング／大平　章　訳　四八四一円
サルトル、最後の哲学者　A・ルノー／水野浩二訳　一九五七円
マルクスの哲学　E・バリバール／杉山吉弘訳　三二九六円
愛の知恵　A・フィンケルクロート／磯本輝子・中嶋公子訳　二四七二円
自由とはなにか　P・ショーニュ／西川宏人・小田桐光隆訳　一八五四円
ギュンター・グラスの40年―仕事場からの報告―　F・マルグル編／高本研一・斎藤寛訳　四九四四円
新不平等起源論　A・テスタール／山内　昶　訳　九九九一円
スターン文学のコンテクスト　伊藤　誓　三三九九円
五五六二円

■放送大学教育振興会
新版　博物館学Ⅱ　大塚　和義　二二七〇円

■明星大学出版部

■早稲田大学出版部
松本亀次郎の生涯―周恩来・魯迅の師―　武田　勝彦　二五〇〇円
ファジィ教育情報科学　山本元編著　三八〇〇円
江戸の翻訳家たち　杉本つとむ　三八〇〇円
スポーツにおける紛争と事故〈日本スポーツ法学会年報第2号　一九九五〉　日本スポーツ法学会編　四五〇〇円
エリザベス朝喜劇10選　第Ⅱ期・全10巻
3　エドモントンの陽気な悪魔　作者不詳／小野正和訳　二〇〇〇円
8　町人奥様　P・マッシンジャー／山田英教訳　二六〇〇円
叢書　ワセダ・リブリ・ムンディ
⑲APEC日本の戦略　宮智宗七・大西健夫編　二八〇〇円
⑳ASEAN躍動の経済　青木健・大西健夫編　二八〇〇円
早稲田大学理工総研シリーズ
5　メガストラクチャー―新しい都市環境を求めて―　菊竹清訓編著　二〇〇〇円
6　建築設備の技術革新―都市生活を支える仕掛けと仕組み―　尾島俊雄監修／建築インフラ研究会編　二〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　国書篇第三期
第45巻　南総里見八犬伝稿本㈣　柴田光彦編　一八〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学篇第一期
第6巻　大槻玄沢集　Ⅲ　杉本つとむ編　三〇〇〇〇円
第10巻　宇田川玄随集　Ⅱ　杉本つとむ編　二八〇〇〇円

■名古屋大学出版会
一般社会学提要

V・パレート／姫岡勤訳／板倉達文校訂　八二四〇円
経済学体系の創成―ジェイムズ・ステュアート研究―　竹本　洋　六四八九円
後漢時代の政治と社会　東　晋次　八七五五円
変動社会の教師教育　今津孝次郎　五一五〇円
名古屋大学五十年史　通史一・二　名古屋大学史編集委員会編　一二〇〇〇円
中世後期フィレンツェ毛織物工業史　星野秀利著／齋藤寛海訳　一〇三〇〇円
近代ドイツの結婚と家族　若尾　祐司　五九七四円

■京都大学学術出版会
類型学序説―ロシア・ソヴェト言語研究の貢献―　山口　巖　四八〇〇円
The Emergence of the 'Abbasid Autocracy　余部　福三　六一〇〇円

■大阪経済法科大学
弥生時代の大阪湾沿岸―河内地域史　弥生編―　村川行弘・小林博編　三六〇五円
台湾市民社会の挑戦　吉田　勝次　二五七五円
日本外交の課題と選択　武者小路公秀編　二七八一円

■関西大学出版部
英語にみる性とことば　吉村秀幸・中村則之訳　一七〇〇円
アメリカ文学史へのアプローチ――作品一〇〇選――　多田敏男・中山喜代市・谷口義朗編著　一五〇〇円
デズモンド・イーガン詩集　折鶴　D・イーガン／安川昱・和田葉子他訳　三五〇〇円
人の顔または表情の識別について（中）　池田　進　四五〇〇円
経営組織論――社会学的視点からのアプローチ――　岡田　至雄　四〇〇〇円
中国〝新時期文学〟論考―思想解放の作家群　萩野　脩二　五〇〇〇円

■九州大学出版会
会計構造の諸問題　服部俊治・藤田昌也編　三二九六円
地域情報化と地域経済の発展―九州地域における自治体を中心として　渡部　榮　四一二〇円
投資関数の理論〈経済工学シリーズ・第2期〉　朱　保華　三六〇五円
資本と労働の経済理論　福留　久大　三六〇五円
催眠面接の臨床　栗山　一八　三六〇五円
自己血輸血ハンドブック〔改訂版〕　福岡自己血輸血研究会編　二〇六〇円
ミクロ経済のゲーム　村田　省三　三〇九〇円
法と政治―二十一世紀への胎動――（上・下巻二分冊）〈九州大学法学部創立七十周年記念論文集〉　九州大学法政学会編　各七二一〇円
創世記逐語的注解　アウグスティヌス／清水正照訳　一五四五〇円
プラトン快楽論の研究―善の研究序説　伊東　斌　五一五〇円
The Black Flies (Diptera: Simuliidae) of West Malaysia　高岡　宏行・D. M. Davies 共著　五六六五円

■流通経済大学出版会
中国現代物流研究　流通経済大学流通問題研究所編　二八〇〇円

■大阪大学出版会
近世広域支配の研究　村田　路人　七五〇〇円
日本経済のマクロ分析　新開　陽一　二八〇〇円
アヌレンの化学　中川　正澄　一〇三〇〇円

●製作の現場から　13

寝るより楽はなかりけり

▼この冊子が発行になる頃は松もとれていることだろうが、今は師走。たぶん来年も寝正月だろうと思いつつ、この文章を書いている。なんといっても、

「世の中に　寝るより楽は
　なかりけり　浮世の馬鹿は
　起きて働く」

である。「馬鹿」というのは今や「好ましくない用語」であるらしいが、古典芸能（落語）からの引用である。ご諒承を。

▼だから（というのはもちろんこじつけだが）、文字列も横に寝かせてやりたいと思う。自然科学系の本の出版社・編集者にとっては横組みは当たり前で、「何を今さら」という感じだろうが、人文科学系になると圧倒的に縦組みが多いのが実状だ。

▼和文だけならばよいのだが、人文書であっても、専門書、とりわけ翻訳書には、相当量の欧文が入る。校正するときにはまず和文を見て、そのあとゲラを横にして欧文をチェックする。読者にしても、読み易かろうはずはない。縦組みの中に横組みの数表や年表が混在することもある。数頁にわたる横組みの数表を右開きで配置した無茶なレイアウトの本も時折見かける。

▼こうした欧文や数表の気の毒なサーカス状態を解消するために、横組みはもっと活用されてもよいのではないだろうか。もちろん、何がなんでも横組みがよいといっているのではない。本の性格に合わせ、縦にするか横にするか、とりあえず考えてみた方がよいということだ。

▼「そんなことはない、日本語は縦組みが原則だ、横組みこそ不自然なサーカス状態だ」という人もある。江戸時代の看板にも、長押（なげし）の掲額にも、横組みの日本語は昔から存在したのであって、私はそれが不自然だとは思わないが、手書き文字に関しては、ここでは縦書き信者の見解を認めておこう。しかし、活字となると話は別だ。

▼手書き文字と活字の決定的な違いは、一つの文字の終筆から次の文字の起筆への「流れ」に存在する。欧文のスクリプト体を別にして、活字はこの「流れ」を切り捨てることによって成立している。しかも日本語書体はプロポーショナルではない。縦横どちらにならべても不都合のないように、最初からデザインされているのである。

▼その意味で、年末になると氾濫するワープロの草書体とか行書体というのは、いわば「発展途上」活字である。本来プロポーショナルにすべき字形を、無理矢理正方形の中に配置しているのだから、どうしても不自然だ。不自然さを解消しようとすれば楷書体に近づき、結局は明朝体に行き着くという自己矛盾を内包している。どうしても古典的なイメージを活字に要求するのであれば、篆書や隷書などの、もともとは一種の活字であった書体をリメークした方がよいのではなかろうか。

▼読者の側ではなく、出版する側の縦書き信者には、未だに横組みは高くつくという固定観念が抜け切れていない人もいるようだ。確かに活版の場合には、横組みと縦組みでは文選・植字工の手の動きが違ってくるから、率の少なかった横組みでは能率が落ちる。高くつくのは当然だったのだ。しかしCTSやDTPの場合には、むしろ横組み割引きがあってもよいと思う。コンピュータは東洋で生まれたものではないから、縦組みは本当は苦手なのである。

▼しつこいようだが、そして当然のことではあるが、何がなんでも横組みがよいというつもりはない。「人文科学の書物は縦組み」と、頭から決めつけるのは、そろそろやめようということだ。やはり活版の時代には高くつくということで敬遠されてきた横組みの脚注機能など、DTPソフトはもちろん、今ではちょっとしたワープロ・ソフトにさえ備わっているのだから、これを利用しない手はないと思うのである。

（下手野横介）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-725-0324 FAX 048-725-0324
慶應通信	〒108 東京都港区三田2－19－30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
専修大学出版局	〒101 東京都千代田区神田神保町3－8－3 専修大学別館 TEL. 03-3263-4238 FAX 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL. 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町2－14－1 TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1－14－1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 0425-91-9979 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘1－1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX 06-877-1614

大学出版(第27号) '96冬 平成8年1月10日発行 発行所 大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円 〒共